

田中角栄に聞け

いまでも田中角栄ありせば

塚本三郎

政権交代の結果、日本の政界は、余りにも痛々しい姿を露呈している。

鳩山由紀夫総理は正気か？という活字さえ躍っている。

このままでは「日本が沈没する」との声と共に、鳩山政権の支持率が二十％にまで下落。既に一年前から準備していた、田中角栄元総理の長所と短所を書くよう、PHP出版社から依頼を受け、終章に及んだ本年初め、田中の直弟子である、小沢一郎、鳩山由紀夫等、与党の各幹部の言動が、師の田中の短所のみが目立ち長所を放棄している。その実体に鑑み「田中角栄に聞け」と出版社が表題を付けた。

永く国政の活動を重ね、その経験から、側面的、客観的に記事として判り易く綴ったので、時間が許せば御一読を期待して止みません。

本書のまえがき

人間社会には、すべて万全はあり得ない。正しい論理といえども、「七分の理」があればそれを押し通す勇氣が必要で、「三分の反対」は留保すべきだ。とくに、複雑多岐にわたる政治の世界では、反対があるからといって決定を避けたのでは政治にならない。

政治の舞台で、三分の反対をどう裁き、対処するかを、日本の歴史上稀有の政治家田中角栄の行跡を教訓として、種々の立場から述べてみたい。

彼は、日本の政治上に新しい、そして素晴らしい分野を開拓した。しかし、そのためにさまざまな問題点を結果として投げかけた。

戦後、吉田茂、岸信介、池田勇人、佐藤栄作らの帝大閥のエリート官僚出身者に対して、田中角栄という学歴なき逸材が出現した。

彼は、官僚的手法では思いも及ばなかった政治手法で「日本列島改造論」を手掛けただけではなく、それを可能とする税制、すなわち「受益者負担」の各種の税制を実現した。

とくに自動車に対する目的税は、道路財源としてたちまち日本国中の道路を拡大、整備、舗装し、車によって日本中の大都会と地方を結ぶ大事業を達成せしめた。今日では、その税は自動車と道路に必要な量を超え、一般財源にまで転用することとなった。

日本の政界は、戦後二十数年にわたって、行政経験の深い高級官僚が首座を占めていた。そこへ田中角栄の登場によって、官僚の上に立つ「政治家の実力」、すなわち人事権と立法権による諸制度の支配が確立された。ここに初めて「民主主義の政治」が第一歩を踏み出したといふべきである。

立法作業と官僚を支配する人事権は、国民に大きな利点と発展をもたらした。すなわち「陳情政治」と呼ぶ、庶民の声を活かす道が活発となった。

だが、その裏には利権を伴うことも少なくない。民主政治は、洋の東西を問わず、多少の利権による汚職は消しがたい。しかし、陳情政治こそ、真の民主政治として機能している。

日本の憲政史上、稀有の政治家田中角栄は、その主たる業績を認められながらも、結果として重大な業績を否定するがごとく、「汚職の首魁」として葬り去られている。

その汚点、すなわちワイロの再発を禁止すべく、「企業献金禁止」という、民主政治にとっては致命的手法を選びつつあるのが、今日の日本の議会政治である。

付言しなければならぬことは、献金禁止の代わりに日本の国会が、献金と同額以上の政党助成金をお手盛りでつくってしまったことである。

政治活動には相当の活動資金の必要が無視できない。それを禁じ、「清潔な」政治の実現と称して、莫大な政党助成金を議員一人あたり平等に（年間約三〇〇〇万円）支給している。

国民の代表者となった国会議員の活動と能力は千差万別である。しかし、国から支給される議員の給与は別として、政治活動費が全員一律でよいのか。政党助成金の制度が、いかに日本の国会議員と各政党の根性を麻痺させているか、心配である。

政治が国民のためであるならば、政治家と政党を支持し育てることは、国民の権利であり、義務でもある。それはたんに選挙の際の投票行動のみではない。それ以前に、政治活動に対して、自らの信ずる政治家個人と政党に、自分のもてる力の一部をもって協力すること、それが後援会活動であり、資金の提供でもある。私財を投じて献金する人は、政治に対する熱心な監視者でもある。その大切な献金の基本を禁止してよいものか。献金のすべてを悪の根源とすることは、国民を罪人視する、否、献金のすべてを浄財ではないと断罪することになる。

ゆきすぎた汚職には厳しい罰則規定があり、いままでにも多くの議員に有罪の判決が適用されている。真の政治らしい姿を表わした田中角栄の治政の「負の一部」をとりあげ、汚職の代表と非難し、やがて企業献金の禁止にまで及んだ。政治献金と政党助成金の、いずれが七分でいずれが三分か。

政党も政治家も、今日では国家と国民の立場よりも、自らの地位と権力の座を占めるための政争に奔走している姿は呆れ果てる。議員となり、多数を得て権力の座に就くことも、国家、国民のために貢献できる手段であるが、目的ではない。それがために、今日の国会は、目的とする国家観の喪失となり、政党助成金に頼る国会議員に政治家と政党の資質が問われている。

有権者の立場から見れば、国家と国民のために身を捧げる「国家の船頭」としての自負心よりも、政治家が観客の前で演ずる役者となり、大切な国会が「劇場政治」という魂を失った演技の場に変わり果てている。それは悲しみを通り越して、怒りへと変わりつつある。

昔の政治家は「井戸堀」といわれた。資産のある人が公のために政治家となり、もてる資産を天下国家のために使い果たして、残ったものは井戸と堀だけだったと伝えられる。

時代は、大きく変わりつつある。昔の例を述べることは愚である。さりとて政治家となることとは地位と金儲けが目的だと見られることは、あまりにも卑しい。

昔の政治はもつとよかった、という声を耳にする。

政治家の地位も名誉も、あるいは資産も、すべて政治目的である「公のこと」、すなわち国家、社会のためである。そのための手段や結果だけが論じられて、大切な政治の「目的と成果」が表面化されないことが口惜しい。

平成二十二年（二〇一〇）三月

はじめに

## 第一章 官僚支配か、陳情政治か

裏日本育ちの男	13
時代が人間をつくる	17
日本の官僚は優秀だが	19
田中角栄と藤原弘達の話	22
頭角をあらわす	25
母の情に生きた角栄	26
ボタンのかけ違い	28
田中角栄の官僚認識	32
田中角栄と稲葉修	35
政治家の本命は議員立法	37
官僚は政治家の部下だ	39

## 第四章 日本列島改造論と土建屋政治

必要な金は備わる	72
会費か、献金か、収賄か	74
税と金融	77
談合はすべて悪か	80
政治献金の活用	82
政治献金と黒い霧	85
田中の着想を生かす	89
田中角栄の力量	92
東名高速と中央高速	94
伊勢湾台風の傷跡	97
信濃川河川敷問題	100
田中角栄と中国共産政権	104

## 第二章 道路特定財源

受益者負担の法制化	43
長期的国家戦略	47
受益者負担の政治	48
「金のなる木」道路と水路	51
国対政治と「反対して通す」	53

## 第五章 ドル・ショックと日米首脳会談

成功と失敗の裏面、ハワイ会談について	107
国会での質疑	111

## 第三章 政治献金はすべて悪か

民主政治とは	59
敗戦後の日本	61
愚民政治	63
墮落政治	65
優位に立つメディア	68
昭和二十七年四月二十八日	70

## 第六章 ロッキード事件の本質

日中国交正常化の光と影	121
田中角栄とロッキード事件	125
ロッキード事件の本質	128
ハワイ会談回顧	134
小佐野賢治について	136
日中国交回復のやりすぎ	141
事件の発端	144
ロッキード事件は謀略だったか	149
田中が真に訴えたかったこと	152

三木武夫首相の「逆・指揮権発動」？ 157

## 第七章 エネルギー安全保障

議員立法「電源開発法」 159  
柏崎刈羽原子力発電所について 162  
エネルギーは国家戦略 165  
田中の自主資源外交 167

時代に適応した政治を  
「反日無罪」の原因は 214

## 終章 田中角栄と小沢一郎

鳩山対吉田の孫たちの因縁 219  
保守合同の自民党 220  
田中角栄と小沢一郎の違い 223  
対等の対米関係とは 227  
鳩山政権の果たした意義 229  
田中角栄の遺産をどうする 231  
角栄がこの世にありせば 234

## 第八章 政治を卑しくした田中角栄

けもの道を駆け抜けるために  
及ばざるは過ぎたるにまさる 171  
幹事長時代を迎えて 175  
佐藤栄作の懐刀 177  
人事は政権の命 180

参考文献 238

## 第九章 大胆に見えて細心

初当選議員として 183  
陰気な酒 185  
七分の理には三分の非理が 188  
攻めには強いが、守勢に回るともろい 191  
田中角栄と竹下登 194  
自公民、夢の政権 197  
私の師は佐藤栄作、と竹下はいう 198

## 第十章 戦略なき案件処理の天才

「田中学校」の弟子たち 201  
激しさと哀しさの田中角栄 204  
負の継承者、小沢一郎 208  
文藝春秋の見事な作戦 210

購読希望の方は書店で注文し  
て下さい。  
書店に在庫が無い場合は、塚本  
事務所にお電話下されば、直ぐ  
送付いたします。送料は塚本事  
務所が負担致します。